



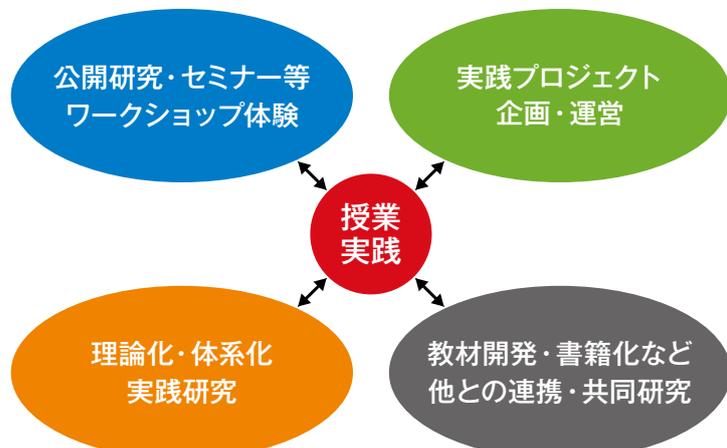
D-press発刊によせて

中川一史 (D-project会長)

2002年4月に発足したD-projectも、13年目を迎えました。D-projectは、一般社団法人デジタル表現研究会を母体とし、「デジタル(Digital)」「デザイン(Design)」の2つの『D』をキーワードに、ICTにふりまわされることなく、子どもの学びをみつめて授業をデザインしていこうとする姿を提案したいという願いから発足しました。当時の参加メンバーは約30名だったD-proも、現在、600人が登録しているML、13のプロジェクト、10の各地の支部、12の賛助会員のサポートや多くの協力を得て全国で年間のべ3000人超のワークショップ参加などをいただき、各地のコアメンバーを中心に展開しています。今年の夏も、札幌、東京、金沢高知、松山、香川、熊本でD-proのワークショップが開催されます。

現在、国語科を中心に、プレゼンテーションしたり友達に説明したりする学習活動、図表などを示しながら話す学習活動、新聞・ガイドブック・リーフレット・パンフレットなどで写真やイラスト、図表などと文章を組み合わせて作る学習活動などが多く見受けられるようになりました。このような活動では、相手意識と目的意識をしっかりとおさえていなかった場合、すべての活動があいまいになってしまいます。表面的に「調べる」「まとめる」「発表する」活動のみをさせている授業は、指導案の計画通りには進んでいるかもしれませんが、ここで何が子どもの学びとなり、教師がどのように介在するのか、メディアとどのように対峙するのかなどにしっかりと踏み込むことが重要なのは言うまでもありません。

D-projectの活動は、授業実践が中心です。それを支えるように、活動は4つの柱で構成されています(図参照)。1つ目は「理論化・体系化」です。D-proでは、メディアで表現する力をメディア創造力とし、「表現学習を通して、自分なりの発想や創造性、



柔軟な思考を働かせながら自己を見つめ、切り拓いていく力」と定義しています。発達段階別の到達目標も整理してあり、これは本冊子の次ページで解説されています。2つ目は「実践プロジェクトの企画・運営」です。今年度は、児童生徒の学習活動としてのプロジェクトと教師の授業力向上のためのプロジェクトとして合計13がたちあがっています。3つ目が「研究会やセミナーなどのワークショップ」です。到達目標などがあっても、実際にそれがどのように自分の授業に適用できるのか、タブレット端末を活用したメディア表現の学習とはどういうものか、イメージがわからない方もいらっしゃるかもしれません。そのよう

なことを体験できる場として全国で実施されています。そして4つ目が「教材開発や書籍化など他との連携・共同研究」です。賛助会員との具体的な共同研究もあります。また、今年度中には、D-projectとして3冊目の書籍も発刊される予定です。今後も、この4つの柱を核に進めてまいります。

そして今年、D-projectの定期刊行誌「D-press」発刊のはこびとなりました。この

D-pressは、年2回発行の予定です。夏の各地の研修会、春の公開研究会などでの配布を念頭に、7月と2月に発刊していきます。実践を支えるメディア表現に関する考え方についての解説、D-proが進める実践の紹介、プロジェクトや各地域のD-proの活動、賛助会員のお知らせまで、D-pro一色・情報満載です。

D-proとともに、このD-pressもこれからよろしくお願いいたします。

D-pro関連の書籍

● D-proの本 ● 関連書籍

- メディアで創造する学びの協働 ～タブレット端末活用編～(仮題) D-project編集委員会(編)、学研 ※今年度中に発刊予定 ●メディアで創造する力を育む 確かな学力から豊かな学力へ 中川一史・北川久一郎・佐藤幸江・前田康裕(編著)、株式会社ぎょうせい、2008 ●小学生が作ったホンモノパンフ 山本直樹・中川一史・北川久一郎・山田康子(著)、高陵社書店、2005
- タブレット端末で実現する協働的な学び 中川一史・寺嶋浩介・佐藤幸江(編著)、フォーラム・A、2014 ●ICTで伝えるチカラ 中川一史(監修) /フォーラム・A、2013 ●電子黒板が創る学びの未来 ―新学習指導要領 習得・活用・探究型学習に役立つ事例50― 中川一史・中橋 雄(編著)、株式会社ぎょうせい、2009

D-PRESS vol.01 | CONTENTS

■ 巻頭メッセージ

「D-press発刊によせて」 1

■ メディア創造力―授業デザインのつぼ

「学習到達目標から考える授業デザイン」 2

■ My BEST1プラクティス

実践報告1 「フォトポエムで子どもたちの感性と表現力を育てよう」 4

実践報告2 「気体X、Yを特定せよ」 6

■ D-projectプロジェクト2014 8

■ 各支部情報 ただ今、定例会中 10

■ 賛助会員特ダネ情報、編集後記 12

「学習到達目標から考える 授業デザイン」

D-project 副会長 / 武蔵大学
中橋 雄 (なかはし ゆう)



メディア創造力の学習到達目標

教科の目標は抽象度が高いため、メディアで表現する学習活動がどのような能力につながっていくのか見失いがちです。そうならないために具体的な到達目標を設定しておくことが重要だと考え、D-projectでは「メディア創造力」の学習到達目標を公開しています。

〔表1〕に示したものが、学習到達目標の一覧です。「メディア創造力」の到達目標は、「A 課題を設定し解決しようとする力」、「B 制作物の内容と形式を読み解く力」、「C 表現の内容と手段を吟味する力」、「D 相互作用を生かす力」の4つの能力項目に分かれ、それぞれ3つの下位項目で構成されています。

さらに、構成要素ごとに5段階の系統的なレベルに分けて示しています。このレベルは、小学校低学年、中学年、高学年、中学校、高等学校の5段階を想定していますが、実態によっては学年よりも低い到達目標レベルの達成を目指す場合もあります。

学習到達目標の活用方法

1つの実践ですべての構成要素を育むことはできません。複数の実践を積み重ね、バランスよく育む必要があります。それを理解した上で、次のような手順で授業をデザインすることになります。

- (1) 主に育みたい能力項目を選択します (例: 「D 相互作用を生かす力」)
- (2) 下位項目の中から育みたい能力項目を選択します (例: 「1 建設的妥協点を見出しながら議論して他者と協働できる」)
- (3) 学年の発達段階を考慮しレベルを選択します (例: 「Lv3 自他の考えを組み合わせながら、集団としての1つの考えにまとめることができる」)
- (4) 年間通じて、どの単元でその力を育むための学習活動を実現できるか検討します (例: 「5年生国語で本のPOPづくりをする実践」 写真1、写真2参照)
- (5) その実践で育むことのできる他の能力項目はないか確認します
- (6) 実践を行い、育みたい力について達成できたか評価します

学習到達目標を活かした授業デザインを

今回はメディア創造力の学習到達目標を授業デザインに活かす方法を紹介しました。

例に示したように、ポップを作るためにキャッチコピーを個別に考え、グループで持ち寄ってどれがよいか選ぶ活動は、集団として1つの考えにまとめる活動と言えるでしょう。その際、自分のよいと思うキャッチコピーが、他のよりも優れている論拠を明確にして議論する中で譲れないところは守り、場合によっては建設的に妥協して合意を形成していく力が育まれます。教師は、そうした活動を促し、最終的に自他の考えを組み合わせながら、集団としての1つの考えにまとめる力が育まれたか評価することになります。ぜひ、このような手順で学習到達目標を活かし、授業をデザインしてみてください。



写真1 話し合いを活かしてPOPを制作する



写真2 完成したPOP

「メディア創造力」の到達目標 (表1)

構成要素	系統性
A 課題を設定し解決しようとする力 1 社会とのつながりを意識した必然性のある課題を設定できる 2 基礎・基本の学習を課題解決に活かせる 3 好奇心・探究心・意欲をもって取り組める	Lv1: 人や自然との関わりの中で体験したことから課題を発見できる。 Lv2: 地域社会と関わることを通じて課題を発見できる。 Lv3: 社会問題の中から自分に関わりのある課題を発見できる。 Lv4: 社会問題の中から多くの人にとって必然性のある課題を設定できる。 Lv5: グローバルな視点をもって、多くの人にとって必然性のある課題を設定できる。 Lv1: 文章を読み取ったり、絵や写真から考えたりする学習を活かすことができる。 Lv2: グラフを含む事典・図書資料で調べたり、身近な人に取材したりする学習を活かすことができる。 Lv3: アンケート調査の結果を表やグラフで表したり、傾向を解釈したりする学習を活かすことができる。 Lv4: 独自の調査を含め、情報の収集方法を選んだり、組み合わせたりする学習を活かすことができる。 Lv5: 様々な方法で収集した情報を整理・比較・分析・考察する学習を活かすことができる。 Lv1: 何事にも興味をもって取り組むことができる。 Lv2: 自分が見つけた疑問を、すすんで探究することができる。 Lv3: 課題に対して、相手意識・目的意識を持って主体的に取り組むことができる。 Lv4: 社会生活の中から課題を決め、相手意識・目的意識をもち、主体的に取り組むことができる。 Lv5: 課題解決に向けて自ら計画をたて、相手意識・目的意識を持って主体的に取り組むことができる。
B 制作物の内容と形式を読み解く力 1 構成要素の役割を理解できる 印刷物：見出し、本文、写真等 映像作品：動画、音楽、テロップ等 2 映像を解釈して、言葉や文章にできる 映像：写真・イラスト・動画等 3 制作物の社会的な影響力や意味を理解できる	Lv1: 制作物を見て、複数の要素で構成されていることを理解できる。 Lv2: 制作物を見て、それぞれの構成要素の役割を理解できる。 Lv3: 制作物を見て、構成要素の組み合わせ方が適切か判断できる。 Lv4: 制作物を見て、構成要素を組み合わせることによる効果を理解できる。 Lv5: 制作物を見て、送りがどのような意図で要素を構成したのか理解できる。 Lv1: 映像を見て、様子や状況を言葉で表すことができる。 Lv2: 映像の内容を読み取り、言葉や文章で表すことができる。 Lv3: 映像の目的や意図を自分なりに読み取り、言葉や文章で表すことができる。 Lv4: 映像の目的や意図を客観的に読み取り、言葉や文章で表すことができる。 Lv5: 映像の目的や意図を様々な角度から読み取り、言葉や文章で表すことができる。 Lv1: 制作物には、人を感動させる魅力があることを理解できる。 Lv2: 制作物には、正しいものと誤ったものがあることを理解できる。 Lv3: 制作物には、発信側の意図が含まれていることを読み取ることができる。 Lv4: 制作物について、他者と自己の考えを客観的に比較し、評価することができる。 Lv5: 制作物の適切さについて批判的に判断することができる。
C 表現の内容と手段を吟味する力 1 柔軟に思考し、表現の内容を企画・発想できる 2 目的に応じて表現手段の選択・組み合わせができる 3 根拠をもって映像と言語を関連づけて表現できる	Lv1: 自分の経験や身近な人から情報を得て、伝えるべき内容を考えることができる。 Lv2: 身近な人や図書資料から得た情報を整理し、伝えるべき内容を考えることができる。 Lv3: 身近な人や統計資料から得た情報を整理・比較し、伝えるべき内容を考えることができる。 Lv4: 様々な情報源から収集した情報を整理・比較して、効果的な情報発信の内容を企画・発想できる。 Lv5: 様々な情報を結びつけ、多面的に分析し、情報発信の内容と方法を企画・発想できる。 Lv1: 相手に応じて、絵や写真などの言語以外の情報を加えながら伝えることができる。 Lv2: 相手や目的に応じて、図表や写真などの表現手段を選択することができる。 Lv3: 相手や目的に応じて、図表や写真などの表現手段を意図的に選択することができる。 Lv4: 相手や目的に応じて、多様な表現手段を意図的に組み合わせることができる。 Lv5: 情報の特性を考慮し、相手や目的に応じて、多様な表現手段を意図的に組み合わせることができる。 Lv1: 他者が撮影した映像をもとに、自分の経験を言葉にして表現できる。 Lv2: 自分が撮影した映像をもとに、取材した内容を言葉にして表現できる。 Lv3: 自分が撮影し取材した情報を編集し、映像と言語を関連づけて表現できる。 Lv4: 自分が撮影し取材した情報を編集し、明確な根拠に基づき映像と言語を関連づけて表現できる。 Lv5: 映像と言語の特性を考慮して、明確な根拠に基づき効果的に関連付け、作品を制作できる。
D 相互作用を生かす力 1 建設的妥協点を見出しながら議論して他者と協働できる 2 制作物に対する反応をもとに伝わらなかった失敗から学習できる 3 他者との関わりから自己を見つめ学んだことを評価できる	Lv1: 相手の考え方の良さや共感できる点を相手に伝えることができる。 Lv2: それぞれの考えの相違点や共通点を認め合いながら、相談することができる。 Lv3: 自他の考えを組み合わせながら、集団としての1つの考えにまとめることができる。 Lv4: 目的を達成するために自他の考えを生かし、集団として合意を形成できる。 Lv5: 目的を達成するために議論する中で互いを高めあいながら、集団として合意を形成できる。 Lv1: 相手の表情や態度などから、思ったとおりに伝わらない場合があることを理解できる。 Lv2: 相手の反応を受けて、どのように伝えればよかったか理解できる。 Lv3: 相手の反応を受けて、次の活動にどのように活かそうかと具体案を考えることができる。 Lv4: 相手の反応から、映像や言語における文法を身につける必要性を理解できる。 Lv5: 相手の反応から、文化や価値観を踏まえた表現の必要性を理解できる。 Lv1: 他者との関わり方を振り返り、感想を持つことができる。 Lv2: 他者との関わり方を振り返り、相手の考え方や受けとめ方などについて、感想を持つことができる。 Lv3: 他者との関わり方を振り返り、自己の改善点を見つめ直すことができる。 Lv4: 他者との関わり方を振り返り、自分の関わり方を評価し、適宜改善することができる。 Lv5: 他者との関わり方を振り返り、自分の個性を活かすために自己評価できる。

「フォトポエムで子どもたちの感性と表現力を育てよう」

愛媛県松山市立八坂小学校
石田年保 (いしだ としやす)

「フォトポエム」の学習活動は、「映像と言葉」を往復しながら表現の質を高めていくことのできる、D-proおススメの表現活動の1つ。D-pro松山においては、岸田知絵先生（愛媛県松山市立興居島小学校）をはじめとする地域の先生方も参加して、「フォトポエム」に取り組んでいる。これまでは、国語学習で詩を作る学習は「言葉」が主体であったが、ここに「映像」を入れることで子どもたちの学習にどのような変化が起こったのか。昨年度は、河崎睦先生（神奈川県綾瀬市立北の台小学校）に「フォトポエム」の評価も依頼し、さらに国語科の学習としてのクオリティを高めようと活動している。

1 学習のゴール

国語科の詩の単元等で、写真と言葉を組み合わせた詩「フォトポエム」を、タブレット端末を用いて、写真と言葉を往復させながら創作する中で、子どもたちの表現力や感

性を育てる。また、学校間交流やコンテストなどの様々な評価活動を通して、一人一人の感性のすばらしさを味わい合い、表現に対する関心を高める。

2 身につけたい力

「フォトポエム」を創作していく中で、子どもたちの感性や表現力を高める。



3 メディア創造力を高める学習のプロセス

●指導計画 (全6時間)

時	ねらい	主な学習活動 (○) と内容 (●)
1	対象を様々な視点で撮影し、子どもたちの驚きや新しい発見をすることができる。 写真を撮影する活動を通して、驚きや感動を見つけ記録していく楽しさを味わうことができる。【A-3-Lv1】	○写真の撮影をする。 ●テーマに沿って、デジタルカメラやタブレット端末で、見方を変えながら撮影をする。
2 ・ 3	写真から言葉を引き出し、写真と照らし合わせながら言葉を吟味することができる。 写真から自分の感動や気付きを読み取り、感じたことが相手に伝わるように言葉を吟味しながら言語化することができる。【B-2-Lv3】	○五感を使って言葉集めをする。 ●五感を意識しながら、写真から言葉を引き出す。 ○詩を創作する。 ●感動や驚きを表す言葉を吟味したり、並べ替えたりして、感動の中心や自分のこだわりを明確にさせながら、詩の形に整える。
4 ・ 5	写真と言葉を組み合わせながらデザインを工夫し、表現の効果を高めることができる。 映像や言葉が伝える内容を考え、効果的な言葉の組み合わせ方や文字の配置等を工夫し、効果的な表現方法について考えることができる。【C-3-Lv3】	○写真と詩を組み合わせるフォトポエムを作る。 ●文字の配置や色、フォントなど、デザインを工夫する。 ●写真と言葉の相互の働きを考えて、より効果的な表現を工夫する。
6	相互評価をすることで、自分や友達の感性の素晴らしさに気付き、表現することのよさや楽しさを実感することができる。 互いの作品を評価し合う活動を通して、自分や友達の感性や表現のすばらしさを味わうことができる。【C-3-Lv3】	○学級や学校間で作品発表会を行う。 ●学級や学校間で作品発表会をし、感想や意見を交換し合う。

●実践の流れ

子どもたちの様子や教師の手だての工夫など

写真を撮影する場面での支援

光の取り入れ方やレンズの角度、対象物との距離の取り方など、撮影の際の様々な工夫や効果を例示した後、「はっとしたことを見つけよう」というテーマを投げ掛け校外で撮影させた。デジタルカメラは、驚きや発見があったときにすぐに撮影できるよう、子どもが自由に使うことができるようにしている。撮影した写真は1年間学校サーバに保管して、他教科の学習にも活用している。

詩の創作の場面での支援

写真から自分が一番強く感じたことや、自分にしかできない表現を「きりり言葉」とし、それを中心にして五感を使ってイメージした言葉を集めたり、広げたりした。言葉を集める際には、色分けした付箋に言葉を書き、完成した付箋を並べ替えたり、組み合わせたりして詩を創作した。

写真に言葉をつける過程で、タブレット端末を用いると、付属のペンや指を使って入力ができる。低学年や特別支援

学級の子どもでも、スムーズに入力することができるようになった。また、自分の字で思い通りに書けたり自由に配置できたりするなど、デザインの幅がさらに広がるので、より自分の感性に近い作品づくりが可能になった。



手書き入力作品

「メディア創造力」育成は、ここで！

写真と言葉の往復の中で育てる

フォトポエムは、写真と言葉の組み合わせで表現するため、写真と言葉の役割を考えることが重要になる。そのため、写真からどのようなことが伝わるのか、再度写真の読み取りをしたり、より効果的な表現になっているか、詩の内容を吟味したりする必要がでてくる。子どもたちは、自分の思いやこだわりと照らし合わせながら言葉を選んだり、表現方法を工夫したりすることができるようになる。試行錯誤しながら、自分の思いを適切に表現できたときの満足感や達成感はとても大きい。

相互評価で育てる

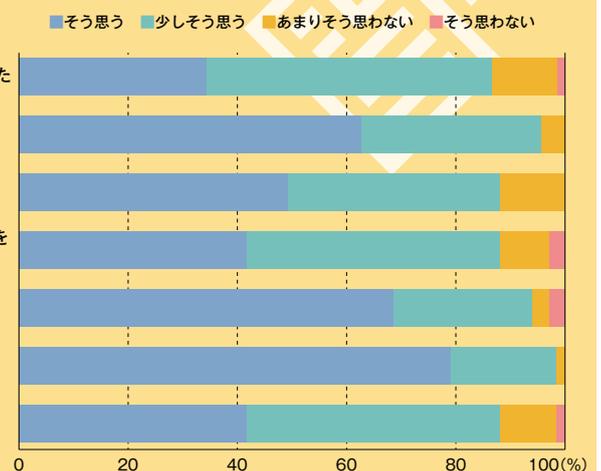
作成後、学級内や学校間交流で作品発表会（相互評価）を行った。子どもたちは、自分が思いを込めた作品が誉められたり認められたりすることで、伝える喜び、伝わる喜びを実感するとともに、表現活用への意欲を高めた。特に、学校間交流をすることで、自分たちの作品の新たなよさに気付かされ、より多様なものの見方・感じ方や表現方法に触れることができた。

[メディア創造力の評価]

松山市4校の児童（3～6年生、計67名）にアンケートを実施した。その結果から、「写真を撮る」「詩をつくる」「デザインする（文字の色や大きさ、配置などの工夫）」という3つの観点すべてにおいて、子どもたちの満足度が高いことが分かった。また、自由記述の回答から、子どもたちはあらゆる場面で、様々な試行錯誤を繰り返しながらフォトポエムを創作していることが分かった。この過程を経て、子どもたちの言語感覚や、写真と言葉をデザインする力などが高まっていることが考えられる。

児童アンケートの結果

- 1 フォトポエムは作りやすかった
- 2 きれいだな、おもしろいと思う写真をとることができた
- 3 言葉を工夫して詩を書くことができた
- 4 文字の色や大きさ、配置などを工夫することができた
- 5 自分や友達作品のよさを見つけることができた
- 6 フォトポエムを作ることは楽しかった
- 7 自分の作品はよくできた





「気体X、Yを特定せよ」

鳥取県岩美町立岩美中学校

岩崎有朋 (いわさき ありとも)

中学校理科の学習指導要領解説には「観察、実験の際には、目的に沿った実験を計画させたり、根拠を示して考察させたりするなど、探究的な活動となるよう留意する。」という表記がある。この根拠は、理科の授業においては実験の様子やその結果得られたものであったりすると考える。今回扱う気体の特定実験の場合も、化学反応の様子、検証の結果など、文字だけでなく、映像と組み合わせることで、誰もが納得できる実験の考察に仕上げることができる。

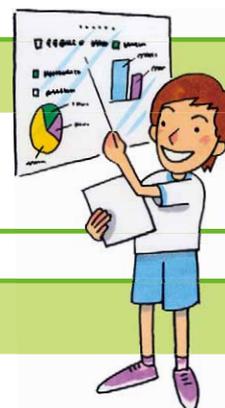
1 学習のゴール

ある化学反応で発生する気体X、Yについて、2つのグループに分かれて、それぞれ特定させる学習である。学習過程では、様々な検証実験をするのだが、その様子や実験結果をタブレット端末で撮影する。そうして考察したもの

を相手のグループに説明する。その際、実験の過程や気体の反応の様子などをタブレット端末で証拠として見せることで、話し言葉だけではなく、映像を交えることでより相手の納得を導き出す。

2 身につけたい力

聞き手からの納得を導き出すための言葉と映像を組み合わせた説明力・表現力。



3 メディア創造力を高める学習のプロセス

●指導計画 (全5時間)

時	ねらい	主な学習活動 (○) と内容 (●)
1	<p>酸素・二酸化炭素の性質を理解する。</p> <p>映像の中で目的や意図を客観的に読み取り、言葉や文章で表すことができる。【B-2-Lv4】</p>	<p>○実験を通して気体の性質を確かめる。</p> <p>●起きた現象を言葉で表現する。</p>
2	<p>水素の性質を理解する。</p> <p>映像の中で目的や意図を客観的に読み取り、言葉や文章で表すことができる。【B-2-Lv4】</p>	<p>○実験を通して気体の性質を確かめる。</p> <p>●起きた現象を言葉で表現する。</p>
3	<p>様々な気体の特徴を表にまとめ、それぞれの気体の性質を理解する。</p> <p>相手や目的に応じて、図表や写真などの表現手段を意図的に選択することができる。【C-2-Lv3】</p>	<p>○発生方法、色、においなどの項目ごとに5種類の気体の特徴を表す。</p> <p>●気体の特徴を表にして分かりやすくする。</p>
4	<p>気体X、Yを特定する証拠を集める。</p> <p>自分が撮影し取材した情報を編集し、明確な根拠に基づき映像と言葉に関連づけて表現できる。【C-3-Lv4】</p>	<p>○気体X、Yの特定実験を行い、説明の準備をする。</p> <p>●聞き手を説得する映像を集める</p> <p>●プレ説明会を行い、説明の弱い部分について指摘を受ける。</p>
5	<p>気体X、Yについて証拠を示しながら説明する。</p> <p>相手の反応から、映像や言語における文法を身につける必要性を理解できる。【D-2-Lv4】</p>	<p>○指摘部分の修正を行い、完成版をもとに気体の説明を行う。</p> <p>●タブレット端末で証拠を示す。</p> <p>●相手の反応を見ながら説明する。</p>

●実践の流れ 教師の手立てと生徒の様子(※指導計画の4・5時の部分について触れる。)

第4時

① 撮影する意図を考える

タブレット端末のカメラ機能で撮影したものは、説明の根拠になるのか、それをはじめてみる人でも「なるほど!」と納得できる映像なのかを常に意識させた。また、撮影のポイントとして、静止画には補足説明の文字を入れる、動画で撮影して実験の過程を見せる、色の反応が見やすいように黒い背景を準備するなど、いくつか指示をした。生徒は、受け手のことを考えながら何度も撮影を繰り返し、より良い映像を集める姿が見られた。

② 「良い意味で」ケチをつける

プレ説明会を行わせた。これは、生徒によくあることだが、自分たちは実験をして気体X、Yが何であるかが分かっている。分かっているからこそ、説明の言葉、資料としての映像、それらをはじめて説明を受ける人の立場でなかなか作れない。そこで、プレ説明会で聞き手側のグ



受け手を意識した撮影

ループから「良い意味で」ケチをつけてもらう場面を設定した。このケチは要するに改善点である。自分たちの思い込みで作ったものでは、相手に伝わらないこともあることを知る大切な機会である。

第5時

① 書くことの大切さを知る

前時の後半のプレ説明会時、文字や図表をホワイトボードに記入し、それを示しながら説明する班があった。とくに1つの教室のあちこちで説明が一斉に行われる場合、言葉の空中戦になる。そのような時に書いてあることを示しながら、書き言葉と話し言葉のセットで説明することは、相手の理解を促しやすいことを生徒は感じたようである。

② 聞き手に尋ねてみる

生徒の説明でよくあるのが、説明を一気にしてしまうことである。そうして最後に「質問はありませんか?」のお決まりの台詞。それを変えるのが「ここまではどうですか?」である。実験の段取りを説明した後、実験の様子を映像で見せた後、実験の結果を示した後と、それぞれの説明場面の節目でこの言葉を言わせた。そうすると、聞き手も質問がしやすくなるし、話し手も相手の理解を確認しながら説明



結果を文字に表す

がしやすくなる。「(聞き手) もう一回見せて。」「(話し手) 色が変化したことがわかりますか?」このようなやり取りがあちこちの説明場面で見ることができた。

[メディア創造力の評価]

日々の実践で生徒に意識させていることは、自分の考えを表に出してこそ伝わるということである。

どのような表現がいいのか、どう伝えたらわかってもらえるのか、その経験の繰り返しが多様な表現力につながると考える。

したがって、メディアを使った学習の場合、到達目標のD：相互作用を生かす力に重点が置かれる。しかし、そこ

だけにとどまらず、伝えたい、分かって欲しいという意識が高まると、到達目標のA～Cの各項目に関する内容に触れるような生徒の姿が自然と見受けられる。

今回の実践では、プレ説明でつけられたケチをきっかけに、映像と文章の組み合わせ、根拠を伴う説明など、A～Dの項目が短時間に切り替わりながら1つの説明に仕上がっていく姿を見ることができた。

D-projectプロジェクト 2014



「メディア創造力」の育成理論を検証するプロジェクト紹介。
今年度は13のプロジェクトがリーダーを中心に立ち上がっています。

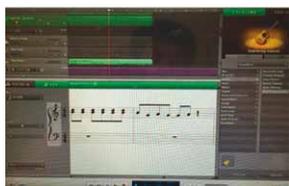
青は「子どもの学習のためのプロジェクト」、オレンジは「教師の実践研究のためのプロジェクト」です。

学級歌制作プロジェクト

プロジェクトリーダー：山本直樹(京都市立桂徳小学校)

今年度から新しく「学級歌制作プロジェクト」がスタートします。子ども達が「こんな学級にしたい!」という願いをもとに、協働的に作詞・作曲します。

タブレットやコンピュータを活用して伴奏も作り、歌声を録音します。自分達の学級に誇りを持ち、いろんな行事の際に歌える歌作りを目指します。



デジタルリーフレットプロジェクト

プロジェクトリーダー：菊地 寛(浜松市立三ヶ日西小学校)

このプロジェクトは、動画、写真(複数)、音声、文章と組み合わせたデジタルリーフレットを作成します。リーフレットを紙へ印刷するのではなく、タブレット端末で相手に伝えるデジタルリーフレットです。その制作過程を通して、構成力、文章表現力、伝える相手と内容に合わせたメディア(動画、写真、音声)の選択・編集などを総合的に育成することができます。



フォトポエムプロジェクト

プロジェクトリーダー：石田年保(松山市立八坂小学校)

このプロジェクトは、写真と言葉を組み合わせた「フォトポエム」という詩を、写真と言葉を往復させながら創作していく中で、言語活動の充実をめざすプロジェクトです。

学校間交流やコンテストなどの様々な評価活動を通して、一人一人の感性のすばらしさを互いに感じ取らせ、表現に対する関心を高めていきます。



プレゼン力育成プロジェクト

プロジェクトリーダー：山田秀哉(札幌市立稲穂小学校)

プレゼン力とは、子どもが相手や目的に合わせて、映像や言語を用いて伝える力です。伝えるための映像や言語とは何かを選択し、理解や納得を得るための構成を考えながら、プレゼンテーションを制作します。この一連の学習過程がメディア創造力や21世紀型スキルの育成につながります。



ニュース番組制作プロジェクト

プロジェクトリーダー：山本直樹(京都市立桂徳小学校)

ニュース制作プロジェクトでは、さまざまな学校行事を題材にした1~2分程度のニュース番組を作ります。その制作過程を通して、ホンモノニュースからの学びや5W1Hを意識した文章表現力、伝える相手に合わせた映像の撮影・選択・編集など、メディア創造力を総合的に育成することができます。



デジタルストーリーテリングプロジェクト

プロジェクトリーダー：甲斐 崇(沖縄県立総合教育センター)

デジタルストーリーテリングプロジェクトでは、NHKクリエイティブライブラリー (<http://www1.nhk.or.jp/creative/>) を活用し、テーマに即したオリジナルの動画コンテンツを制作します。静止画以上に情報量の多い動画素材を編集し、目的や相手に応じて、試行錯誤しながら伝えたい作品にブラッシュアップしていくことが活動のポイントです。



ユネスコプロジェクト

プロジェクトリーダー：水谷浩三(暁学園暁小学校)

貧困や争い、差別等で非識字を余儀なくされている8億人近くの皆さんに学びの場を実現するユネスコ・世界寺子屋運動。リーフレットを制作し、支援活動に立ち上がる子ども達。メディア創造力の育成に迫り、自己有用感・自尊感情を培うプロジェクトです。小学生から高校生まで発達段階や学校の状況に応じ授業デザインできます。



私のまちのたからものプロジェクト

プロジェクトリーダー：小島源一郎(奈良市立佐保小学校)

「私のまちのたからもの」をテーマに、「映像・言葉・音楽」を効果的に使いながら、目的意識や相手意識を持って身近にある地域についてのスライドショーを作成・発信する活動を通して、地域の文化や自然を愛し、地域に誇りを持って守り伝えていこうとする気持ちを育てるプロジェクトです。



ネットdeカルタプロジェクト

プロジェクトリーダー：山中昭岳(関西大学初等部)

ネットdeカルタとは学校や地域自慢のカルタをつくり、評価し合う交流学习です。読み札と絵札づくりでは映像と言語の往復を図り、互いのカルタを伝え合う場面では差異やズレを実感して自らを振り返ります。さらに、建設的妥協点を探りながらブラッシュアップするところが肝となっています。



タブレット端末英語活用プロジェクト

プロジェクトリーダー：栄利滋人(仙台市立大野田小学校)

本プロジェクトでは、タブレット端末を活用した英語の授業パッケージの開発、プレゼン制作用のアプリを活用した教材開発をします。ネイティブの音声を生かしたインプット中心の授業、電子書籍用の指導案開発、会話のやり取りがある協働活動、外国の学校との交流をインターネットで手軽にやり取りする活動などをタブレット端末の特性を生かして実践します。



情報の比較・分類力育成プロジェクト

プロジェクトリーダー：岩崎有朋(岩美町立岩美中学校)

各教科の内容を理解する上で、情報を比較・分類し、整理する場面があります。しかし、比較のベン図や条件整理の表を、思考スキルとして取り上げ、指導することは少ないでしょう。

本プロジェクトでは、児童が休み時間等にポケタッチを通してベン図や表に慣れている状況のもと、先生の教科指導とうまく繋がるように接続プログラムの活用指導案を作成します。そして、遊びの時間に「自然に」身に付けた思考スキルを、授業中に「関連付けて」活用させ、児童生徒の比較・分類する力を伸ばすことを目的としています。

児童の“見取り”促進プロジェクト

プロジェクトリーダー：福田 晃(金沢市立十一屋小学校)

協働学習では、どのような話し合いがグループにおいて行われているかを把握することは非常に困難です。児童を「見取る」といいますが、どのような観点で、どのように見取っていくことが必要なのでしょうか。本プロジェクトでは、協働学習時における教師の「見取り」について追求していきます。



国際協働学習の設計と評価プロジェクト

プロジェクトリーダー：清水和久(金沢星稜大学)

同年代の外国の児童生徒と成果物を作成する国際協働学習プロジェクトです。国際競争ではなく国際協働を目指し、相手と建設的妥協点を探りながら日本の学校の総合的な学習の成果を生かし、1枚の大きな壁画を作成します。その為に教師がどのように単元の設計をし、評価すべきかを考えていきます。



プロジェクト参加募集中!

一緒にデザインを考えていきませんか?



プロジェクト、MLへの参加に関するお問い合わせはこちらまで

●D-project事務局
043-298-3401

(放送大学中川研究室内：村田直江)
<http://www.d-project.jp>

各支部情報 ただ今、定例会中

「D-pro関東」を皮切りに、毎年「D-pro支部」が名乗りを上げています。
「各支部情報 ただ今、定例会中」では、その支部ごとのユニークなオフラインの会の様子をお伝えします。
皆さんの近くの研究会に、顔を出してみてもいいですよ！

北海道支部

D-project北海道は、北海道メディア教育研究会と共催で、年2回夏と冬にセミナーを開催しております。もちろんメイン講師は中川一史先生。そして、発足以来温かく見守ってくださっている佐藤幸江先生です。毎回100名を超える「やる気のある教師」が集います。セミナーの内容は中川先生の基調講演、佐藤先生の切り口によるパネルディスカッション。そして、実践者による実践発表とワークショップです。実践発表では、初心者とベテランによる発表を交互におこないます。ワークショップは、毎回その時期のICTの旬をコーディネートして4本おこなっております。会場は北海道内でも屈指のデザイナーズホテルにて開催し、たいへん居心地の良い環境をご用意し、協賛企業の皆様のご協力の元、皆で学べる環境を整えております。また、月1回、アップルストア札幌においてミニワークショップ「ティーチャーズナイト」を開催し、毎回、定員の3倍ほどの来場者で店内は熱気に満ちあふれた中で学んでもらいます。もちろん毎回懇親会も開催し、こちらも盛況です。ぜひ札幌にお越しください。

加藤悦雄（北広島市立双葉小学校）

関東支部



正式名称は「D-pro関東inspire」です。関東の主力メンバーは、約30名弱。メディア表現活動の授業デザインに関心をもつ仲間達です。日頃は、群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川と各地で、それぞれのスタンスでの授業研究や地域における研究会開催に取り組んでいます。『いざ！春の公開研

究会」となると、より満足度の高い研究会にしようと皆の力を結集できる仲間達です。今年の3月の研究会には、約150名もの参加者を得て、日本各地から実践やICTの先進情報を持ち寄っての熱い議論が展開されました。3年間毎月開催していた若手の会「D-pro関東sprout」が、発展的解散をしたこともあり、中間の時期にそれぞれの地域の若手を集めての研究発表会を開催できればと考えています。

佐藤幸江（金沢星稜大学）

東海支部



2013年3月に発足したばかりの東海支部です。静岡（浜松）を中心に、三重、愛知、岐阜地域です。年に1回、ワークショップ研修かセミナー（公開研究会）を開催を予定しています。昨年度は、浜松でワークショップセミナーを行いました。今年度は、冬にワークショップ研修を計画しています。詳細は後日お知らせします。東海地区のネットワークを広げながら、メディアで表現する授業実践アイデアを共有化していきたいと思えます。

菊地 寛（浜松市立三ヶ日西小学校）

金沢支部

つくろうニホンの教育フューチャー！金沢から新しい風を！を合い言葉に、今年も年4回の学習会（5月25日、9月27日、11月29日、2月14日）、そして8月9日には7回目となる夏の研究会を開催します。これらはすべて地元、石川県教育工学研究会との共催です。金沢の大きな特徴は、現場の教師、校長などの管理職、大学の研究者、



そして教師を志望する学生など幅広い層の参加があることです。平均年齢もぐくくと若くなっています！学習会や夏の研究会に参加された方からは、ふだんの職場とはちがう見方を学ぶことができ良かったという声もよく聞かれます。金沢だけではなく近隣市町村、はたまた県外からも参加もあるほどです。子どもたちに楽しく、分かりやすくそして力がつく授業を実践するべく切磋琢磨しながらがんばっています！みなさん共に学びましょう！

小林祐紀（金沢市立安原小学校）

関西支部

今年1月11日（土）に京都市立桂徳小学校を会場に、D-project in京都を開催しました。テーマは「タブレット端末の教育活用」。総勢80名を超える参加となりました。中川一史会長による基調講演や3本のワークショップ、シンポジウムなど大変中身の充実したセミナーとなりました。このようなセミナーを今年も大阪、和歌山、京都など各地で実施していきます。

山本直樹（京都市立桂徳小学校）

香川支部

D-project香川は、これまで各プロジェクトで活躍していた地元のメンバーが集まって、2014年1月に発足した新しい支部です。四国では先輩支部の松山や高知と連携し、D-pro四国として、地元に着した研究を進めていきたいと思っています。メンバーは、随時募集していますので、お気軽にお声かけください。お待ちしております！この夏、地元の香川メディア教育研

究会と共催で、7月26日(土)に、夏季セミナーを開催します。会場は、JR高松駅から歩いてすぐの高松シンボルタワー タワー棟4・5階の「情報通信交流館 e-とびあ・かがわ」です。中川先生、佐藤先生をお招きして、実践発表とワークショップを行います。D-proとしては、フォトポエムのワークショップを開催します。海の玄関、高松で撮った写真に、あなたの思いをこことばで表現してみませんか?参加申し込みは、こちらからどうぞ。<http://kokucheese.com/event/index/174087/>この夏は、香川で、「D-pro」と「うどん」と「骨付鶏」を…

増井泰弘(丸亀市立郡家小学校)

高知支部

D-project高知では、D-project松山の協力を得ながら、公開授業とワークショップを主体に、毎年、県西部・中部・東部の3地域にて研究会を開催しています。高知支部では、先生や子どもたちがワクワク、ドキドキ、ときめくような授業づくりについて提案をしていきたいと考えています。今年度は、次の3つの研究会を開催する予定です。県内外を問わず、多くの仲間が集まることを期待しています。

- 平成26年7月5日(土)
会場：香美市立山田小学校
- 平成26年8月2日
会場：四万十市立中村小学校
- 平成26年11月8日
会場：未定

詳細はウェブをご覧ください。

<http://kitkat.sblo.jp/>

若林 章(高知市立高須小学校)

松山支部

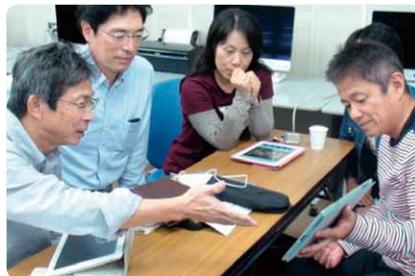


D-project松山では、松山のメンバーを中心に、「フォトポエム」のプロジェクトを推進しています。今年度は、フォトポエムに特化した研修会を年3回実施する予定です。研修会を通して、子どもたちの感性と

表現力をより高めることができるように、指導のポイントを伝えたり、みんなで考えたりしていきます。(第1回目の研修会は6月28日に行います。)さらに、今年度は松山市の情報教育研究委員会とタイアップしてフォトポエムの教育効果についてのアンケート調査を実施します。この活動は松下教育財団からも助成を受けています。また、今年度第5回フォトポエムコンテストを実施します。コンテストの要項等は、D-projectのHPに掲載する予定です。みなさん、ふるってコンテストに応募してください。よろしくお祈りします。

石田年保(松山市立八坂小学校)

熊本支部



熊本では、熊本大学教育学部情報教育研究会の定例会として毎月1回開催しております。今年度のテーマは、ズバリ「タブレット端末の活用」。特に「初心者向け超入門講座」は、すでに使っている人達にも好評を得ております。

午前中はレクチャーによって新しい知識を獲得し、午後はワークショップによって各々のアイデアを共有できるようにしています。ワークショップでは、デジタル作品やプレゼンテーションといった新しいものを創造する活動によって、楽しみながら学べるようにしています。毎回、県内外から30人程度の参加があり、40人を超えるときもあります。どなたでも参加できますので、ぜひ気軽においでください。

7月27日(日)、8月16日(土)

9月6日(土)、10月4日(土)

11月1日(土)、12月6日(土)

1月24日(土)、2月21日(土)

熊本大学情報教育研究会ブログ

<http://jugyoukenkyu.cocolog-nifty.com/kumajouken/>

山口修一(熊本市立託麻北小学校)

沖縄支部

D-pro沖縄は、平成6年に発足した沖縄



県マルチメディア教育研究会が母体となっています。研究会では平成7年から毎年1回県マルチメディア教育実践研究大会を開催し、いち早くテレビ会議等を活用した授業実践を行い、情報教育の研究を行ってきました。平成18年度からは、D-projectと共同で年に1回の県大会で公開授業とワークショップを中心に継続開催。デジタルコンテンツやデジタル教科書、また近年ではiPad等のタブレット端末を活用した授業づくりを研究の柱として行っており、一昨年は小学校総合、昨年は中学国語で公開授業を行いました。2014年度は、11月22日土曜日に中学校数学でのiPadを活用した公開授業と、iPad活用ワークショップを行う予定です。

甲斐 崇(沖縄県立総合教育センター)

“D-proちよっといひ話”

D-proは私の履歴書

D-pro発足メンバーとして参画した2002年は、総合的な学習の時間がスタートした頃で、担任をして情報教育推進担当としてデジタル表現活動による学びを追究していました。2003年に学社共同によるユネスコ寺子屋プロジェクトを立上げました。12年間継続するD-pro老舗のプロジェクトに育ったのは、教師間の強力なコミュニケーションでした。

2005年に教頭職に就任し、その後5年間は後継者育成やワークショップ講師、プロジェクトのコーディネートといった実践者支援の立場でD-proの活動に参画してきました。

2010年に校長職に就任し現在5年目。D-proの歩みは正に私の教師としての成長です。

水谷浩三

D-project副会長/暁学園暁小学校校長

賛助会員特ダネ情報

SKY株式会社

www.sky-school-ict.net/

中川一史先生監修の【タブレット端末活用実践事例集】を、教育委員会、学校の教員、職員の先生方に無料でお届けします！上記のURLからお申し込みください。

スズキ教育ソフト株式会社

www.suzukisoft.co.jp/

今年の夏も中川先生をメイン講師に迎えD-Projectのエキスがギュッと詰まった「伝えるチカラ育成セミナー」を、7月21日（大阪）8月23日（東京）で開催します。●お問い合わせ：053-444-0080

株式会社ポケモン

www.pokemon.co.jp/

中川先生総監修！子どもがタブレット、PCを自然に活用できるようになる入門教材「ポケタッチ」<http://www.pokemon.co.jp/poketouch/>が新登場！基本操作の訓練から情報の可視化による思考力アップまでカバー。

株式会社青井黒板製作所

www.aiokokuban.co.jp/

弊社は、ICTと板書が融合した新しい教室環境を御提案しております。現場の先生方の御意見を広くお聞きして、より良い教育環境創りに貢献したいと思っております。●お問い合わせ：03-3387-3330

泉株式会社

www.izumi-cosmo.co.jp/screen/

「まなボード」はワークシートをはさむ、書き込む、黒板に貼れる、3拍子揃ったグループ・協働学習を支援する、超軽量ホワイトボードです。誰でも簡単にすぐ使えます。●お問い合わせ：03-5719-7482

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

www.unesco.or.jp/

夏休み期間には、教員研修会や幅広い年齢層の児童生徒が参加できる様々な事業を予定しています。詳しくは、当連盟HPやFacebookを是非チェックしてください。●お問い合わせ：03-5424-1121

株式会社ジェイアール四国 コミュニケーションウェア

www.collabonote.com/

弊社は、協働学習支援ソフトの定番「コラボノート」をご提供しています。クラウドサービスとiPadやAndroid端末などのスマートデバイス対応で、新しい学びの形をご提案しています。●お問い合わせ：087-821-4520

公益財団法人理想教育財団

www.riso-ef.or.jp/

当法人は、「はがき新聞」を使った授業の研究と普及に傾注してまいりました。「考える力」「書く力」「伝える力」の涵養に大きな効果が認められています。ICT利用による効果アップを図ってまいります。●お問い合わせ：03-3575-4313

パイオニアVC株式会社

pioneer.vcube.com/edu/

パイオニアソリューションズは2014年5月からパイオニアVC株式会社になりました。今後も協創支援する教育プラットフォームである「xSync（バイ シンク）」を中心に、ICT活用の普通教室時代を見越した授業支援システムを開発・販売して参ります。

株式会社ガイアエデュケーション

www.gaia-edu.co.jp/

タブレット保管庫や組み合わせデスク等の制作、iPadと連携した電子黒板mimioとのコラ

ボなど「ちょっと未来の教室」をキーワードにした製品をご提供させて頂いております。●お問い合わせ：03-6809-3881

ダイワボウ情報システム株式会社

www.pc-daiwabo.co.jp/

あらゆるICT機器、ソフトウェアを取扱う国内トップディストリビューターです。導入サポートや教員向け研修なども取り揃え、教育のICT化をご支援致します。●お問い合わせ：03-5746-6513

株式会社LoiLo

loilo.tv/jp/

【協働学習】写真動画文字を線でつなげるだけでプレゼンができる大人気タブレットアプリの学校版、授業支援ロイロノート・スクール。配布回収比較。モデル校募集まぐめ間近！●お問い合わせ：loilo@loilo.tv

公益財団法人学習ソフトウェア 情報研究センター

www.gakujoken.or.jp/

7月29日「情報教育セミナー2014」に行こう特別講演に安西先生をお迎えし、お馴染みの中川先生コーディネートのワークショップ！お申し込みは上記URLから。●お問い合わせ：03-6205-4531

株式会社学研教育出版 教育ICT事業部

gakken-ep.co.jp/

今年秋発行を目指して、D-projectの実践事例満載の書籍「メディアで創造する学びの協働～タブレット端末活用編～(仮題)」を準備中です。多彩な事例を募集中です。●お問い合わせ：03-6431-1405

編集後記

記念すべき、第1号を皆様にお届けできること、わくわくしております。初めまして。編集長を務めさせていただきます佐藤幸江@副会長です。D-press 発刊に向け、たくさんの方々にお世話になりました。まずは、言葉に表せないほどの感謝を申し上げます。ご協力ありがとうございました。

この会報誌は、「授業の質を向上させたい」「メディア表現力の学習のアイデアをもらいたい」「がんばる先生方のサポートをしたい」等など、様々な思いをもって参加されているDな皆様をつなぐ「かけ橋」になりたいと考えております。第1号では、中川会長の発刊に向けた熱いメッセージ、なかなか手に入りにくかった中橋副会

長を中心に作成した「学習到達目標」の提案、実践メンバーの中核となっている松山の石田先生、鳥取の岩崎先生の実践報告、「現在進行形」の支部や賛助会員の情報など。残念ながら日程が合わずに、春の公開研究会や地域の会に参加できない方にも、できるだけ豊富な情報が伝わるように載せていきたいと考えております。

夏休みの研究会などでお会いした際に、会報の感想やこんな記事がほしいなどうかがえとうれしいです。年2回、次号は、2月に発行予定です。どうぞ、お楽しみに！



それぞれの色を大切に